

特43

72

奇談
異聞
梅亭
松平
光岡
山
備後土産
稻生夜話



091325-000-7

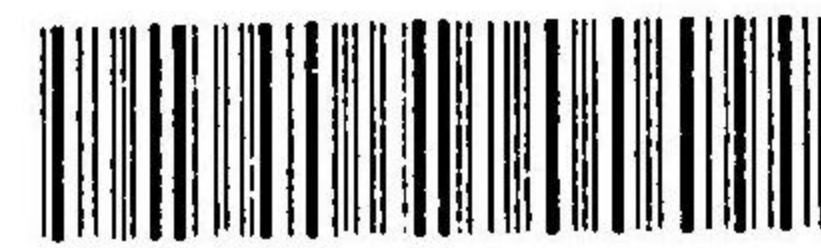
特43-72

備後土産稻生夜話

梅亭 化作/編

M17

DBN-2203





相馬の古御所の妖怪の京傳の怪談と現る一重の葛籠の
 化物の豆合巻の三ツ目一ツ目光の推兒供の伽譚り
 小過す實小函根から此方への野暮の化物の無言の行燈天共
 中国筋の此限の能知る所なり而して東京の行燈天共
 世の能知る所なり而して東京の行燈天共
 金物や茶碗の空中を舞歩行等の話の間ありや究理開明の
 氏風作の如何と知らんと志さし遂に備後土産を編しつるも
 氏作の名通ふ之も又彼の妖魔の所為ふやあらん可々

明治十七年一月

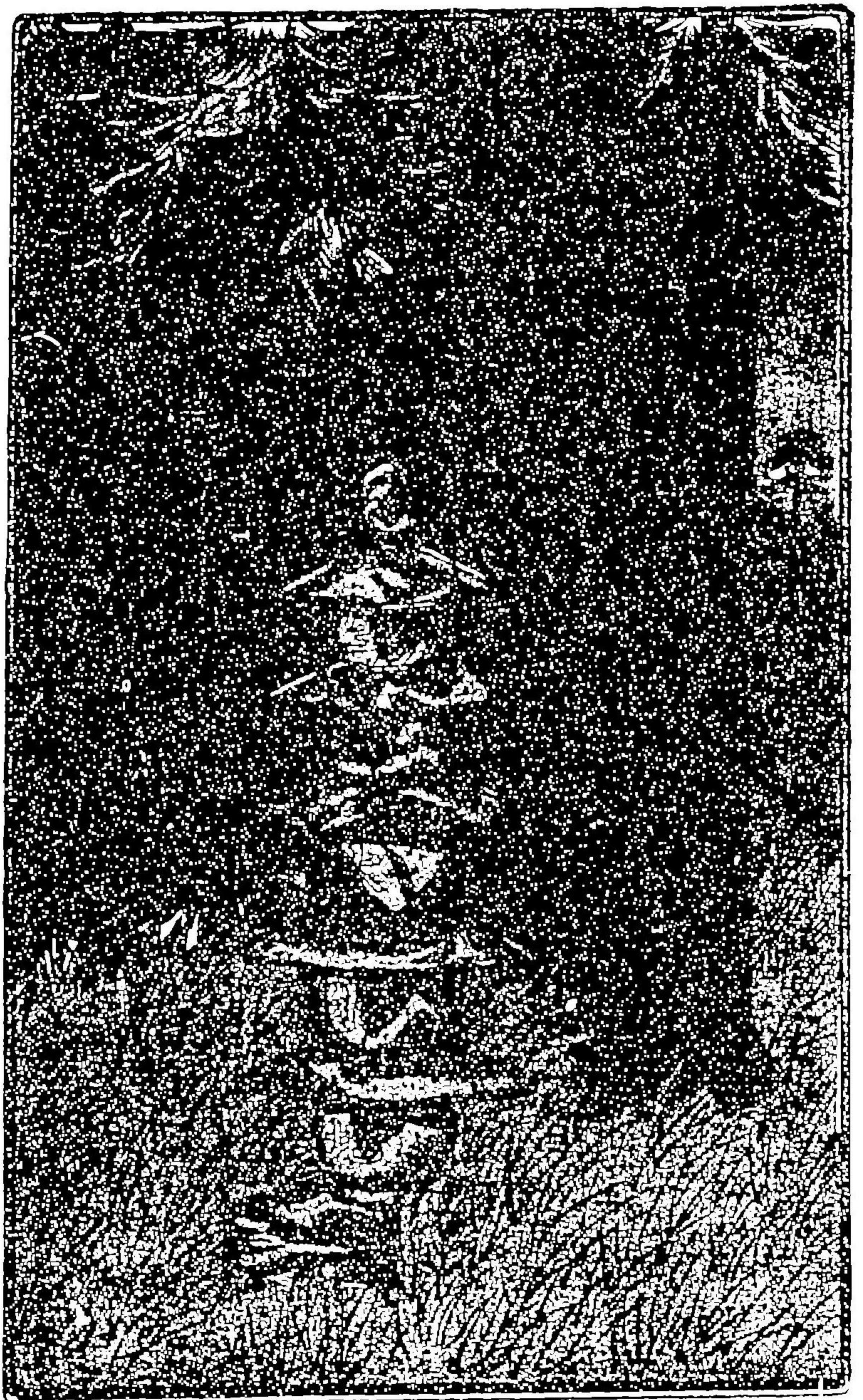
梅亭金鷲識

○梅亭吟化作編述

○奇說 備後土産稻妻夜話

○東京旭昇堂藏





奇説 備後土産稻生夜話

東京 梅亭化作編述

第一回

傳聞源頼光の異形の怪異に遇く身を苦めしも之を退治く蛭蟪あるを知り大森彦
七の鬼女は出會是を斬るも年經る狸よくわりしとある泉州堺浦の石地藏化之旅人
よ斬れ東京午込の銀杏化之往來の者を驚のそ杯杖擧る暇あらざと雖ども多くの狐
狸の類ひの業ありかし今茲よ解起と物語り猛獸の所爲よあらま眞の魔玉よ出會く一
の奇談を殘せしも實に珍敷とよぞある開の今を去る百三十有余年寛延年間の事にし
て備後國三次郡上布努村に稻生武左衛門と云武士あり代々國主よ使へて五百石を
領し留主居役を勤何不足なく世を送れり然るに夫妻の中に子なきを愁へ或日妻を一
間へ招き我最早四十路に余れと未だ一子を設けざれば富て財を貯ふるも讓るべき者
なき時の先祖へ對し不幸此上なるべしと語ると聞て婦は澤の氣の毒さに暫時とばも

涙に呉て居りし頃て頬を揚妾逆も神や佛に誓を込何卒子供を授給へと祈れども出来ぬ女の身の不幸只此上の願ひ世續を設くる其爲に妾を抱へ賜れと只管勸て云々れど武左衛門の承引す否々妾など抱なば世間の口色に溺れし杯と言れんも遺憾ければ僥倖同家中の中山源七が次男の新八郎を養子と貰いて養育んと語るを聞て妻お澤の初て安土心持しつ其後中山へ掛合て双方納得しければ終に新八郎を引取我子の如く愛しみ蝶よ花よと養いたるよ光陰の箭よりも早く何時過て星霜遷り安永四年と新玉の立春も霞深き三月の頃より妻お澤月の經りと見ざるゆへ武左衛門の醫師を招き診察を請し疑なき懐孕なりと告ぐるよそ夫婦の歡喜大方なり是や八百萬神が授を賜し者ならんと益々身体を大切よ月の満ると待うちよ何時の其期來りて出生せし玉の如きの男子よして殊も母子とも惱なく最健康よ肥立よそ名を平太郎と稱なしつ目出愛しみく手の裡の玉の如くに養育けり

第二回



去程より平太郎八歳の頃より手蹟素讀を學びたるも稽古より歸ると間もなく子供を集めて角力を取り或は軍の真似をなしく戯れれば子をみることに親も老の此者往々るの天晴の勇者も成んと思ひければ武左衛門善師を撰み平太郎も武藝の消を教んと心懸し殿の師範設吉田次郎の若年なら適のきの壯士と思ひしより終り吉田も入門させ武道を習せたりけるが兩二年よりしと門下内より平太郎も及ぶ者なき程に至りし故師匠も大に喜びて未頼母敷武士として彌々勵まし教けり茲も又延享三年に至り次男勝彌出生し其後寛延元年二月中旬武左衛門不圖病の床よつき次第も重る容子ゆへ妻の元より新八郎半太郎も俱々に心配あして醫師を招き服藥介抱怠りなく種々に手當を盡せども其効更よなければ親族集りて只心痛をぞる已なりしか妻のお澤も夫を思ふ看護の疲れか床につき二個俱々十月の初に果敢なく消て行露の草野の人となりければ兄弟親戚泣々も野邊の送りを濟せし後平太郎の伯父川田茂右衛門を初として兄新八郎實父中山源七一同評議の上家督の新八郎も繼しめ平太郎の別家とせし去

なから未だ若年なれば暫時兄方に同居して一兩年の暮とべし勝彌の某が改めて養子になさんと相談極め跡念懇に取片付各々歸宅をなしとるが新八郎此程より氣分悪しとて打臥しかば平太郎も心配なし伯父茂右衛門に相談して中山方へ知らせければ源七も稻生の家の無人を察し暫時拙者が預りて養生させんと云ければ茂右衛門初め平太郎も其志を厚謝し一向依頼て送り後毎日平太郎兄新八方へ到り客子と問て心を慰め然して家に歸れば文武と學び家來一人召仕ひ留主居をなしてぞ送りたる

第三回

閑話休題單表稻生の隣家へ此頃三の井權八郎と云者來りて住居たるも此權八の元下布努村の百姓山田權右工門の一子よして享保五年も出生元文元年十六才の折而親も別れ叔父武田文右工門も養ひれしが人とありと農事を嫌ひ角力を好みければ叔父も其志を愛其意も隨せたるを權八の大に喜び大坂へ到り其頃關取某の弟子とあり程さく幕の内に上達し何れの場所にても負を取りしことなき故紀州公其手柄を譽め

抱とち―後和歌山へ随ひ行て長く此地に留り大關迄よ名を擧―が如何ある悉細有し
か紀州を退きて自己が故郷三次郡布努村へ立歸りし後叔父の家を尋しよ三年先に死
去しとある百姓家で語るを聞力泣々權八の稻生の屋舖の隣家ある明家を求めて住居
けるよ人に勝れし力士ゆへ聞傳來て弟子よ就者多く殊よ安藝の廣島より磯の上乱獅
子鬼虎駒ケ嶽龍ケ鼻荒磯釋迦ケ山磯ノ海等の相撲取ら皆三の井を尊敬えて師の如く
に寄集ひ稽古杯始めたり左れを平太郎も角力を好みけるゆへ何時か三の井と懇意に
あり音信せざり―日逆いなく最交際と厚―て益と親み睦み―も猛き二人の大膽より
身に降かゝる五月雨の雨が取もつ妖怪を見顯さんと壯士力士が災ひ求める藉口と知
る哉知らそや電妻の後にぞ思ひあたりたる

第四回

恣て三の井權八の或日稻生の屋舖に到り頃日續く五月雨よ最と徒然あれば何ぞ終日
語ハんと互よ猛き談話をあせしが頓て權八稻生よ向ひ我幼きより人の話に妖怪變

化よ誰され苦惱を受し杯語るを聞と自己が遇ることをあければ一度にても出會く其
正体と見顯―生捕に―と見んものをもと思ひをり―に幸ひよ頃日村の噂に大熊山へ怪
物いづると聞ければ今宵彼處に行て見ん君の如何と問けるに稻生點頭是の面白しと
て忽地同意賛成爲―ければ權八郎の重て云やう然ば後刻鬮引あし當りし者が行と定
めん―先拙者の歸宅して其用意を致べければ君の宅の用事を濟せ後刻手前へ御出あ
れと言葉を残して立歸り跡に稻生は用事を濟せ家來を呼び委細を托し屋敷を出て
隣家ある權八方へ到りけるよ豫て待居三の井の井の大い歡喜茶杯を入種々奇談よ時刻
を遷々頓て二更と告ぐる鍾陰―と響きて物琳々く此時雨の益々降りたれば時刻こ
そ宜なれと鬮取せまよ平太郎その鬮入當りまかば卒趣かんと立上り袴の股立取上て
簑を着し笠を冠り權八方を立出く黒闇も別ぬ鳥羽玉の闇路も搦はず大熊山の麓の方
へと趣きけり

記者曰大熊山の三次郡の西方よ登へ峨々たる巖生谷間あれども深谷にして水遠

く樹木茂りて晴るることおければ登山する人甚稀にして最嶮岨の巖石みち凡
五十町斗登りし處よ干疊敷と稱へ三次若狹守の館の跡あり夫より亦二十丁過て
三次殿の塚あり其墳墓の彼方よ幾千と經るとも知れぬ杉の大木あり此を名付て
俗に天狗杉と云幅員八廣にして枝の地よたれ墓を覆ひ茅多く生じ梢の雲に隠れ
物凄きこと限りなく里人噂し之此杉に手を付る者ハ忽ち祟りありと言傳へ之近
寄く見ることありと云

第五回

斯て稻生平太郎ハ降るる雨を笠に凌ぎ麓の方より登り行に雨風烈く殊に闇夜なれ
ハ何れを道とも判然ねど草を路分行程に幽に響く谷川の流の音ハ聞ゆれど四邊森々
として見ると能ハ遠音に傳ふる 狼の聲も止て只寂莫と物淋し平太郎ハ三次殿の
墓と覺しきよ行當りしかば手探りよ艸を結付記しともし一息ついて下向よ趣きしが
その途中何あるか正体明らかぬ者來り行當るよ驚けハ彼方も驚愕飛退て物をも言せ一

刀を抜より早く切付る此方同抜放し丁々丁と切結ぶ闇も見く氷の稻妻白刃の光
りよ彼方より聲と懸け須臾またれよ待須臾と云よ此方も初めて知りし人の聲も倍ハ
變化よハあらざるやと言時彼方言葉掛け稻生氏にハハハすや倍ハ貴公ハ三の井氏ハ
と互に無事と歡喜く後平太郎ハ三の井に何故此處へ來られしと云を打消權ハ平太郎
に向ひて君の歸りが遅きゆへ若し何とぞかありもせば川田様や御兄様此權ハ相
濟ねば兎にも角にも行てみんと君を尋に來りしに不圖出會ハ闇夜の疎忽赦ハ給へと
詫ければ平太郎ハ聞取ず君どの知らず只今の無禮且ハ御配慮下さる段添けおしと一
禮を打連立て歸り後濡し衣裳を脱換て大熊山の况杯を問答て居きどハ別に奇
遇もあらざるゆへ暫時憩ふそのうちに夜ハのくくと明渡るに平太郎ハ一先歸邸爲
べいと暇を告ぐ歸りたり其夕刻權ハ稻生の邸に音便と互に笑ひ言るよう妖怪杯の
ことを世よ喋々話々傳ふるハ實よ小兒の戯言あり誥らぬまどをまぐたりと大熊山よ
往しを後悔おまハが其後の斯る事もせせ月日を送り何時七月と遷り替り暑氣増ハ納



三の井権郎

縮生平太郎

涼かてら三の井の稻生と俱二筋川の邊と遊歩をさんと出行なり

記者曰二筋川の上布努村より半道斗り東に當る水源の大熊山の脇より出て一筋の流あれども二十四五丁先より二筋に分れ流る、故にや原川上り川と云然るに此川に魚の住替る話あり原川に一尾もあし上り川に一尾もあし上り川に一尾もあし原川に一尾もあし斯源へ同一流にして魚の品の住替るの不思議と云ざるを得ざるあり然れども陸奥の壺の碑の邊りの川に一尾の渡りこぬ例あれは同類あるべき歟二筋川の大熊山の脇を過北原宮を通て原川上り川に流る水勢急よして河原廣ければ大熊嵐は暑を忘れ飛行燈ハ秋の夜の星のごとく水の面を寫る月影の寒き夜の氷に似て實に絶景の勝地なりけり

第六回

當下兩個の川邊に到り塵打拂く大石は腰打掛納涼ける大熊山の方を當り小き黒雲出ると等く晴渡りたる夕月も何時雲間へ隠されて忽ち暗夜に變最物凄く指も勝地の

二筋川あれど寂莫として見へけるうち電光ひらめき雷の音烈く鳴渡り俄に降來秋雨ふ二個の吐き濡きまゝ足と早めて立戻り各々我家に歸り平太郎の六助に寐衣を出させ濡衣を脱替蚊屋に入とぞ休ける六助の主人が濡せぬ帷子を掛竿に掛て干つ自己も部屋に退き枕に就て寐たるは暫時ありと六助が煩りと苦しむ容子故平太郎聲を懸呼起て子細を問はば六助の面色青ざめ物をも云ひ得ざる故平太郎猶も言葉世話敷問かたれば六助額の冷汗ぬぐひ主人に向ひて言たるは唯今迄が枕に就き眠ると間もさく突然は何處より來るか大入道飛入り私の上を跨り擱んで呑ん勢ひは驚き恐れて思はず聲を出せぬ其折且那樣のおこゑに目を覺せど猶未だ夢の如くは思ひを升ると叱りつけられは是非あくと部屋のみすみしく虚勞々と見廻るら再び横に寐たれど眠られもせぬ蒲團を冠り夜の明るを千年待間の心持しつ驚き震へく居りけり平太郎の今一寐入せんとせし折柄吹來風は行燈の燈火消て眞の暗一雙寐の増ならん

と其儘枕に就たる折椽の障子に寫る燭は驚き出火ありと思ひ帳帳を巻上り起出でて障子に手を懸明んとしと引ども動ぬぬ大磐石を氣を燥立障子を蹴倒そ骨の碎けと明されば燃上り火の消忽ち元の眞の闇平太郎不審み須臾不み居たるうち身体自由な動ぬぬ様も成たれぬ彌々奇の思をさへ一個考へをるうち以前の如く明るくなる故瞳を定め向と見るは庭の彼方暗黒き大坊主立塞のり眼と怒らす其光りの明鏡の旭は輝く如くなりと丸太の如き手と伸し平太郎の襟と掴み表の方へ引出さんづ勢いあれは了得の稻生も大に驚き六助刀と持參れと呼ど六助氣を失ひ一の返事も絶てあられば力を極め妖怪の手と拂はんとする機後堂と倒れし枕刀を取上さま妖魔を目懸斬付し怪物早く椽下に入れば稻生益々勇氣を奮い庭へ飛下椽下へ續て入らんとせしとも椽低くして入事のあわづ残念なりと思ひはん座敷に來り疊越に突通さんと手探りに探れと疊あらざるゆへ手燭を尋て火を燈し四邊を見れば疊の片隅に殘らず積でありし盆々呆て茫然たり

第七回

此時三の井ハ隣屋敷の騒動きに不圖目を覺して容子を伺ふと平太郎の響る聲又驚き何事やらんと起上り寐衣の儘よて表へ出稻生の屋敷に入らんとせし折何れよりの來りけん十一二歳の女の童權八郎又行違ひさま突然飛懸り咽喉を押へて放さねば權八怒て化物の両手を掴み大路へ投付んと爲れども身体痺身動きさへ出來ざれば齒切をなして呆れ入りし思の思の後ハ倒れ暫時氣絶なしをり頓て蘇生りて四邊を見れば妖怪の姿ハ失て東雲告る鶏の聲ハ夢の覺たる如く起立り心付て稻生の門を叩き聲を懸きと答へまさ故裏手の方より入らんと庭の枝折戸引明て椽側のら登りたるハ平太郎之を見て亦妖怪の來りしのみ一太刀ハ斬捨んと刀を抜て振上るハ權八驚き聲を懸三の井あるぞ稻生氏と云きて熱々その顔見色の紛ふ方なき權八故平太郎力を得て能ぞ來らざるなりし三の井氏とく座よ即せて後怪物の容子を不殘語りなきハ大膽不敵の權八モ妖魔の所爲に恐れをなし入りまの權八もまた先刻此方へ來る折女の童よ

出會氣絶させし況より身体へ熱氣を生せし事を物語りなきより平太郎と供々ハ疊杯引直て手つだひしが無分ありく成りしとて立歸り其翌日より枕又就き次第ハ病い重りしとぞ

第八回

茲又家來の六助ハ遠寺の鐘よ夜ハ明て聒を出る鳥の聲ハ心付表よいでこれと夜前のこと思の思ハ怖さよ震ながら門の戸ハ寄懸り四邊を詠めイみ居るうち此處彼處よて雨戸を開き起出るるハ漸く少力を得て近處隣へ到夜前屋敷へ化物出強く惱されたりと語りければ人々みお恐と生じ夫のら夫へと觸廻りしゆへ終ハ村中の噂となり麥倉屋敷ハ化物出て稻生の小天狗をかびやのすとの評判せしより若者等はハ面白ことありとて我もくと見物の麥倉屋敷の門前ハ集り來るも多かりけり斯れば稻生の伯父川田茂右衛門これを聞付捨置難きことあり連一早く馳來り平太郎ハ面會して怪事の況を問し後平太郎ハ諭して言よう何分此屋敷ハ其方一個置ハ心許をし因て一

度屋敷を退き我等の方へ来るべしと懇みよと一けれども稻生の血氣の若者ゆへ聞入
 せべき氣色更ななけれバ伯父茂右衛門の果果其儘打捨歸りゆく後下男六助の稻生
 に向い言葉と改め永の年月御恩と受今御暇と希まするの本意よあらぬことなから
 怪物の爲よ苦められ何分御奉公なりがたけれバ暫時御暇給りたしと只管依頼よ是非
 なく家來に暇と遣し自己一個で居住し十六歳の若者よ最珍敷魂と人々感賞
 取りとぞ平太郎の其日も若方よありけれバ夜食と仕舞行燈取出し火と燈し今宵の如
 何あることとすすの生跡を見現のし引とらへて呉んすと待捲く居るをりから家中の
 朋友武内傳吉横井孫作森川一平の三人尋來り今宵の我等の伽をいたせバ貴君の早く
 休給へと云を稻生辞退すれども剛入さきハ僥倖と心よ歡喜然らバ依頼まうすとと初
 夏すきまで語合自己ハ其座を退きつ臥戸よ入と休みけりさるほどに三個の若者の妖
 怪來らバ生捕く手柄を見せんと勇立勢込こと可笑けれ時刻やハ丑滿近くありけれ
 ハ何となく物淋しく覺え今迄男一三人も頻に眠りを催ふす折柄吹來る風の窓うつ音



森川一平

横井孫作

武内傳吉

に心つき三人俱是の思わを眠を生じりりと咄さながら茶を呑まんと茶椀を取て茶を
汲折柄突然茶椀飛上り座敷の中を飛廻りければ各々顔を見合し是不思議ありと云
うちに行燈自然と歩行出し其機手足のゐるごとくあれは皆々あれと首ふうちに
火鉢舞上り三個の圓に灰ばらしと廻りければ各呆れ之逃走り竊に我家へ歸りり

第九回

翌朝にあり三個の仙人の再度稻生へ來り様子と問夜前云々のことありしゆゑ實の恐
れ之歸りるるが其後に不審ことの無りやと尋られども稻生の別に替りし事あけ
れ其趣を告げるに各々平太郎が剛膽は呆たる折柄兄の實父中山源七見舞に來り
怪車の次第と尋るゆへ其大畧を物語昨夜是々のことあきと我の少もあらざり最
早此限りにて即するべし必お氣遣下さるまじと云ふ中山安堵あり然ハ新八郎にも
申告べし何よもせよ其元一個にての不自由あらん我等方の下男八藏と習時遣一程く
により遠慮あり使へしと最眞實に言合めてぞ歸りける斯りければ近郷近在まで麥

倉屋敷に化物出種々雑多を怪異を顯し夜あけ家鳴震動して怪敷ことのみ多かり
かど益評判する程又夜毎又里人ら稻生の門前も夥しく群集せしかども娘子供ら
の氣味悪くと怖れと退くへ出る者なく夜中圓へ行さへも一個で行のあらざるより其
沙汰村の役所よきこゑ役人と以て稻生の屋敷と見聞せしよ全く變化の所爲とわか
ど施す術あらざるより見物群集差止の趣と書記一麥倉屋敷門前へ掲げ出せる其文
に曰く

一今度麥倉屋敷に怪事有之右に付村内の不ヤ及近郷近在まで聞傳て群集あり晝夜
の差別なく動搖なれば其爲は百姓共の農事を怠りし義も有之故も聞之且婦女子よ
於て驚怖る者少のらずに付今日より當屋敷門前へ群集差止ひは付屹度可相
守申者也

備後國三次郡

布努村々役所

寛延二年七月六日
右の如く大筆よ書認之建しるは此後群集せざりいとぞ

第十回

附言稻生屋敷と指て麥倉屋敷と稱し、常は麥と多く庫の中は貯りと云いとある
 借も稻生の養子新八郎、此二三日少し気分快く病の床と離さしゆへ久振よて平太
 郎に面會せんと思たち實父に告て里を出遊歩なから養家へ來り平太郎と訪ければ此
 方兄の來りしを大に喜ひ相互に團圓など出して手合な一驚と鴉のあらそひよ日を
 暮せの平太郎兄よ向い今宵泊つて行給へと進むれば新八其意よ任せて泊らんと約
 する折柄俄に雨を催せば新八郎僂伴と下男八藏を呼床を敷せて横よなり平太郎と談
 話杯して有けるうち雨烈く降來りければ最早今夜の音信る人もあるまじとく平太郎
 も俱よ床と敷枕よ就んとする折柄鴨居の上の穴よりして何ともしれぬ物飛出し二個
 が寐し蚊の上とくるく廻る容子ゆへ新八郎の何ならんと瞠ととへて熟々見れば今
 日しも自己が履來りし下駄よてわれは大に駭きは何とこと、稻生よ問は平太郎答て云
 やう是そ妖魔の所爲なれと怖るゝことあらざる故捨置給へ氣支なしと雖も新八大よ

怖れ眠れもせで稍暫時見つめて居る其うちに何處へ行いや消失ければ漸く新八安堵
 あり再び枕よ就んとすると傍の掛竿よ投掛置し帷子の袖の中より一の生首出ると等
 しく新八郎へ飛付況よ見へたれば彌々増々驚怖なし生たる心地あらせして蒲團を冠
 夜明と遅々と待兼けるうち早東雲の鶏の聲告渡るよ心嬉く起出つ稻生よ送られ實
 家なる中山方へ歸りしが此後病再び重り煩いけるこそいたのしけり平太郎の兄と
 送り我屋敷へ歸り來り近所の若者五六人來合今宵の皆々伽致と云よ稻生心に可笑く
 此人々も武内や横井森川なぞと同一にて皆逃歸るべしと思へと言を飾るを千萬忝
 じけなし何分依頼と云うちに山寺の鐘の早くも初更を告渡れば稻生の一眠りに就
 しが後又大勢奇合て四方山の話をな一何卒怪物を生捕て手柄あさんと争ふうち何時
 月ハ山の端に隠れて最々物琳しく風まで颯と吹來る人々何よと奇く物凄くありそ
 つと身の毛さの落ち寒を覺ゆれば火鉢の邊へ膝よよせ互に顔を見合しつ薄氣味悪く
 まり込る折火鉢の中より忽然と炎燃上り穂のごとき玉とありに伽の人々膽を消

一度は飛退逃げんとする座の中へ堂と落たるが其音のすさまじくして恰も落雷せし
 況あるに各々顔色青ざめ周章庭へ飛び命をらう逃歸れば稻生の余りさわがしさに
 に起出けれど別替り様子おけれバ伽の八々のをらざるゆへ彼らも又怪事罹り
 逃歸りし者ならんと心付四邊と窺へバ疊刻返して有ゆる敷直し見る床の間の前
 なる疊の真中二尺四方ほど真黒に焼けてありしこのことならんと思ひすて其
 儘寐つ翌朝見れば焼たる處少くもなく元の如くにありしといふ

記者曰稻生平太郎怪事罹りし凡三十日間より七月一日より晦日までこの
 とあり此中同一奇話あるも少のらるを并り看客の退屈あらんと恐るれば省きて言
 ぞ只日毎替りし話語りし詰りて綴れバ一日より二日三日と順次を追記せしゆ
 系巻中日台の合さる處の同一奇説と見せし咎め給ふと勿らんを乞ふ

第十一回

恁て稻生の十三日の八時半頃より所用ありて横新田といふ處の上田治太夫方へ到り

けるよ折巻上田在宅よて久振連聲應ゆへ辞もあらせ馳走よなりかもし懸あく日を暮
 し遅刻せしバ治太夫又暇を告て戻り道三次川の邊よ來のゝる時月の邊間をいで
 岩打波の照添ひて流よ踊る水玉の螢火行風情よて葦の晝を忘れけるゆへ歩み静に
 道芝の露踏分て行んとせし時傍らに年の頃二八斗の乙女が雪の肌さへ顯して絶入り
 一の打臥し居るに稻生駭き今頃此處らに倒れ居り必づ涙と委細ぞあらん何よもせよ
 哀れなり救てやらんと懐中より薬を取出し口に含ませ流の水を汲取て娘の口に注ぎ
 介抱せしよ須臾ありて我よ返りし様子ゆへ平太郎聲を懸女中心の正のあるの今我此
 處を通行せしに不圖和女の絶入りたるさまを見兼救し者ぞと云々れば彼方の手弱女
 心付何處の御方の存下ませねど消る此身をお救下さる御恩の程ありがたう存ますと
 言バ平太郎點頭つゝ、一と和女の何れの者の包まを語べしと云に乙女の最とさづの
 げよ今何の包ませう姿ハもと藝州廣島在の者なりしが幼き折父母に別れ伯父の
 世話にあり養育受くかりますうち伯父の病の床につき伯母と妾と三人にて朝夕細き

烟さへ立兼る身を思につと妻も永の此年月養いうたし恩報一も身を川竹よ沈めても
 伯父の病や伯母の身を救ふ手段をせん者と覺期極しよ伯父伯母早くも其心を知りて
 妻を留め譬此儘死るとも和女を苦界に沈むる杯思もよらぬと云よ妻も一度ハ留まれ
 と貧よ苦しを何分見のね密よ宅をぬいで日頃懸念よ出入る松田の菊次と云者ハ人
 の世話をとると聞彼よ依頼く身を賣んとお譯言て依頼ければ彼承引て僥倖長崎の丸
 山より婦女を抱へよ來る者あるよより我と共に行べしと云ゆへ妻の嬉しく偽りあり
 とハ知らぬゆへ仕度して誘われ途中よて菊次の想籠と雇ひ妻と乗運れ來り頼て駕籠
 を下させ妻か手を取引出し駕籠屋を歸せし後捕へて強姦所存ありし故其難を逃れん
 と妻ハ早く此谷間へ身と投しなりと委細語るを打聞く稻生の愍然の事よ思ハ然ハ此
 川上と和女ハ何處かえらざるべけれど是ハ備後國の高山よ大熊山と云ところ豈さ
 へ人の行來稀なる魔所とも構ハお連行しハ大膽不敵の惡漢あり我ハ上布努村よ住む
 稻生とハ武士なり猶委細の話ハ我家よと篤と聞たる上和女と伯父子の許へ送り届け

と得さすべければ一度我家へ來られよと之彼の手弱女を伴なひツ家路とさし歸り
 我家へ入りたる後衣裳替則よいより再び座敷よ來りて見るよ乙女ハ其處よ在らざ
 ればふ密よ思ハ次の間勝手の方よ尋ねれど更よ行衛ハ知れざりたり

第十二回

不題下布奴村の職師よて長倉作平といふ者あり稻生ハ屢々出入りて懇意なれば頃日
 噂を聞稻生よいたりふ沙汰のことなど説しのち作平云るよう變化と除るよハ西行寺
 の薬師如來灼然なる由承まハれば彼佛像を借受信心なさば退散とべしと云よ稻生も
 物怪よ持て余せし折なきハ作平ハ勸め任せ開ハ幸ひのことなきハ其方行てハ吳まじ
 やと依頼よ作平承知してセツ下りよ稻生をいで西行寺へと趣く途中敷の小路よか
 る折しも日の暮ハく、暗の夜よ提灯携へ一個の武士此方をさして作平よ行違ふことさ
 顔見合し貴君ハ曾根源之巫様其方の長倉作平か何れへ行やと問かけられ今宵稻生よ
 依頼て薬師の繪像を西行寺へ借よ参りと告しかハ源之巫自己ハ持し提灯を作平よ貸

與うれバ大ニ欣喜作平ハ彼の借受し提灯照し松原さして急けるよ並木の中頃過んど
 する折自己の前ニ暗黒ニ大防主立塞れり其惣身一丈余りよし之眼ハ百練の鏡の如く
 口ハ耳までさけらるる作平目懸捕喰んとする勢ひなるよ長倉駭るき震上り逃んどす
 れど身体すくみ其處へ倒れて氣絶なせし之稍あり之蘇生透りを見れど彼の幼主の姿
 見へねバ吻と息つき夢よ夢みし心地去く西行寺へハ行ぎ飛か如くよ自己の家へ歸り
 しハ實ニ理りなり稻生の長倉作平の歸りを待とも夜更るまで歸り來らねバいかやせ
 しぞと案安じ眠りもやらで居たるうち二更を告る鐘の音よ今宵ハ最早來るまじと獨
 言つ、闔房よ入らんと立上る後の方よ平太郎の袖引留れば何者ならんと振向よ昨
 夜三次の川邊より救ひ歸りし乙女なれば口ハ怪物覺醒せよ我を偽り欺きしと言より
 早く一刀引拔斬く懸れば彼の乙女の儼然として煙の如く消失けり再説長倉作平ハ
 翌朝稻生の屋敷よ來り夜前途中よて去かぐと彼の源之丞に行合夫より松原よて化
 物よ出遇氣絶えたるよ怖れ逃歸りしよ因り今朝會根よ到り昨夜借受し提灯を松原よ



奇説

稲生平太郎

妖怪

て落失し詫ことせしよ全く昨夜敷小路にて提灯を貸たるの曾根源之亟よわらせして
化物の所爲なることまで落さく物語りければ稻生も須臾呆て居たり

第十三回

案下長倉作平再び稻生よ打向ひ只今より西行寺へ参りて畫像を借來れば暫時猶豫下
さるべしと云捨て直又西行寺へ趣々和尚教戒よ面會して稻生の怪事を語りければ教
戒も變化の所爲を深く怖れ藥師の畫像を貸與ければ作平大よ喜び彼佛像を懐中して
稻生よ立戻り手渡よして早々其身の立歸りぬ平太郎の佛像を床の間又掛置香花を備
へ今宵の如來の功力よて少しの續まることあらんと頻よ藥師を所居するよ其藥師の
掛物糸よて釣し如くふらり〜と空中を歩行出しければ稻生のまたも惘果功力なぞ
との事可笑と打捨置きければ彼畫像の自己と佛間よ道入たる平太郎一個笑しツ床を
のべ枕よ就て眠りけるが暫時ありて目を覺し不圖蚊屋の中を見れば數多の生首築り
て平太郎の顔をなめ或ハ上に轉げのり種々よ狂ひ廻れど少しも構ハ老怖るゝ氣色

あらし高剛のき難なるハ實よ不敵の剛膽あり去程よ川田茂右衛門の今日しも益の銀
祭りとして平太郎を招きけるよ辞もならねば伯父の家よ到りよるに親族一同協議して
皆平太郎に諭て云よう如何に其方の強氣なるも此後若過ちあらば其身のたまれ親族
まで世の物笑とあり後悔するとも詮方ならん殊よ其方の身の上に凶事ある時ハ先
祖の位牌に我等の云分たち難ければよの道理を聞分て一度伯父の手元へ來り伯父
に安心させよしと皆口々よ説き諭せど血氣よ速る若者ゆへ變化の爲に憶しよると言
れんの残念ありとて更よ聞入るけしき無れば各々呆きて此後ハ口を出そ者絶たるを
返て稻生の僥倖ありと思ひ如何よもして怪物の正体を見顯ハさんとぞ苦しみをぬ
或日のとあるが稻生一個今宵の雨降れば早くより休まんと戸じまりあしく座敷よ來
れば懷孕女背向に倒れて居る故平太郎彼の女の腹の上に打乗なとして戯むるれば女
の鼓腹忽ち破臍腑四邊に散乱蛆と變トてうごめき歩行ハ了得の稻生も當惑奇し鼻を
擤みて居りたり

第十四回

十八日の晝頃向井次郎右衛門といふ重兵衛といふ獵師を連れりて稻生に面會させ次郎右衛門平太郎に向ひ此重兵衛の幼きより蹄を掛く猛き獸を捕に妙を得られは是までの得物の其數これぬ程なり貴郎の變化も又獸の爲と推察せしにより重兵衛も語り合蹄の良よて生捕んと相談なして連れりしと云ふ稻生の忝々とし向井に一體ありし後彼重兵衛も打向ひ蹄の工夫と問けるよ重兵衛進密り我若年風源寺といふ寺よて大般若經の自然と空中へ舞上りしことありし何等の所爲とも知らざるより和尙を初め人々怖れ駭き一が其噂高くあり參詣の人さへ來らざるよより我これを氣の毒と思ひ狐狸のさすむさよ相違なからんと心つきければ彼寺院の裏門前の森の此方へ蹄を掛一にあんに違ひせ一頭の毛物蹄に掛くさけびけるを翌朝見たるよ年經一古狸にくありけるゆへ捕押打殺せしが其後の彼寺院に變一ことなく今よ參詣群集なせり經文の空中に舞しも全く捕得一狸の所爲なりき斯一頭の獸のためよ衆人の難儀に

遇の残念なることなるべし又先年我ら大坂へ登一折皮賣買の場所へある獵師の持來り一狸の皮の長サ一丈二尺幅八尺よ余り一のべ問屋の主人も珍敷狸なりと云ゆへ自己也又定めし年經さる狸ならんと問は彼の獵師大よ笑ひ貴方よ似合ぬ目利のな此狸の最若き狸にて生さちの大なる者なり狸に限ず獸類の種類多くありて同るいよくと十種あり二十種あるもありされども此如き狸のまゝ稀あり凡そ人を誑め獸の誑めよのざらき一種別よして捕得るよと難しと語しゆへ自己も此獵師よ就て只管人を化獸を取得る事を尋ねければ彼獵師重ねていふ人を誑す獸に至てのしこし因て常は獵師を恐れ深く谷間杯は隠れをりて容易よ姿を見せぬなりねよ其形常の犬程よなりて後いろく況々の形をさして人を誑し人を惱すと云り其狐狸ともよ皮厚毛並あらく捕得ても其用少し都て獸を捕よの蹄を用ゐるの専用ありと教へより因て拙者も是迄取得たるの彼獵師の傳し如くよ爲して數多の獸を獲たるされば今宵もかんな家の怪物よ蹄を仕掛て取押へん亦彼獵師の咄よ大坂よて天満宮の社の三社よ見へしことわ

其時我夜更に密に彼所より到り蹄と掛わら大なる山猫を獲て怪事を除しまとありと傳ければ必き蹄の仕掛まそよのらめとて其手筈もぞ極なる

第十五回

日の暮果て夜更に追々更けよ獵人重兵衛の雪隠の裡に隠れ次郎右衛門立歸れば稻生の重兵衛の摸様如何のあらんと一個莞爾その音信と待つうちにキヤット叫べる聲せしゆへ平太郎仕濟たり借こそ怪物の重兵衛の蹄の異に掛りたきと手燭を燈し刀を携へ厠の前より來てみれば此の如何の雪隠の戸散碎重兵衛の居ざる故案は相違し此處彼處を尋るよ重兵衛の庭の彼處は倒れ居りなきに平太郎大に憫いそぎ重兵衛を介抱せし漸く重兵衛人心地つきさきと夢みし如くよて茫然たれば稻生聲を聞えし重兵衛如何いたせしそと云きてホット一息し先刻初更を告げたる鐘の音ぞつと身も染て毛穴も逆立覺えけるゆへ妖怪來りし者あらんと息を殺して窓の中より蹄の仕懸を賺みれば踏落しの方よりして丸太の如き手を延し雪隠の戸と諸共我等を掴て庭へ投

出さきたるよての覺あきど其後の更に正体をし左きとも拙者の考へよ狐狸の類よあらざして必き天狗の所爲なるべく思ひるなり危がる目よ達たりとて荒思敷よそ歸りければ稻生の一個小首を傾け是まで伽も夥來るも一個として氣丈の者なく隠病未練の人斗よて意氣地さきの限りなきに越し伽人へあさまを却て快よけれ己後の如何あることあるとも斷り呉んと私語ながら其夜の枕よつきたりしが翌朝超いで彼蹄の仕懸を見るよ庭の垣は釣ありて昨夜損し雪隠の戸扉の少も損せ元の如くよありければ稻生妖魔の奇術を感じ奇妙なとを爲る物かと思ひの爲れども驚く様子ありかりしとぞ借も獵師の重兵衛の稻生の屋敷を逃歸りし其翌日より惣身は痛を覺へて起臥も自由あらを煩いなるの最氣の毒のことよぞありたる

第十六回

茲に陰山庄左衛門と云ありその舍弟の正太夫の平太郎とい竹馬の友よて交りも厚かりしゆへ一日稻生へ尋來り怪事の話をし居よりしが願てことよ正太夫傍らの袋の



獵師重兵衛

稻生平太郎

中より一振の白鞘の刀と取出し是のこれ我兄庄左衛門の先年主君より拜領せし備前
 長船の銘刀なり御覽よ入んと差出せば稻生取上熟見の眞は稀世の銘劍ゆへ如何なる
 ことよて御秘藏の此給ものを御持参ありしと尋れば正太夫の其儀他をらす今宵拙者
 伽致し此物怪と此刀よて一太刀又斬て棄後難を除かんとする所存ありと稲生喜悅
 开の忝けなきことありとて是より猶瓦は語る四方山話も永き別れとある鐘の入相告
 る秋の暮最ど琳しさまさるめり折柄降くる村時雨も心落つきてよしと二箇の夜と共
 り語らんとく對座をし居ると早牛満ともおぼしき頃勝手の方より女の首をろりく
 と座敷の方へ轉げ来るゆゑ正太夫彼長光の一刀を抜より早く斬付るよ流石名刃のと
 くあるか彼生首二ツもあり消るの如く失されど其一刀の目釘折て走り飛び柱は當り
 て眞ふさつに折されば正太夫駭き面色忽ち青覺て須臾言葉もあらざるより稻生は
 氣遣ひ正太夫よ言ふ斯大切の銘刀の柱に當りしぐらいよと折るの合點ゆゑざるなり
 去乍ら如何めさるゝ御所存と云れく陰山正太夫斯ある上の是非なしおめく歸宅も

なり難ければ死く兄へ訖せんにと稻生荒果押止早まり給ふを陰山氏畢竟我の難氣を
救わん爲ふをさされしなれば貴殿の過ちあらす拙者の不調法も同ことゆゑ夜明あは拙
者より御舎兄よお詫まうせば必き氣遣めさるかと論稻生が心根ハ實親友の情あるべ
し然れど正太夫の逆上せしる自己の脇差抜より早く腹へぐざつと差通し嗚呼と叫ん
て息絶ければ稻生ハ駭き正太夫と救起して介抱すれども施す術ハ非ざりけり稻生の
陰山正太夫の死骸を詠て我云ふを聞給ハ命を捨るよハ及ふまじきと早遇てこそ
恨みあれ貴殿よ死なれてハ猶以て御舎兄よ此平太夫が言別た、を遺憾なことをあり
行しと思案の折柄鶏明曉を告るよふと心付人の來らぬそのうちよと陰山の死骸を
納戸の中隠し血よ染りし墨あど押片付少、思廻らせば逆も此儘にてハ濟難し若し
庄左衛門このことを聞かば定めし我が害せしと疑えんハ必定なり一ツよハ此事伯父
の耳にいりなば諫と用ぬ故といへるも口惜し今さら思ひ廻せば親戚の言葉よ叛き
し科めて斯る難儀を引出せしならん兎も角よ其筋へ願檢使を受たる其上にて

御沙汰と待が本意ならん然いへお上のお手敷を請れば伯父茂右衛門や兄新八も苦
勞を掛て面目なし此上ハ是非よ及ばせ我も正太夫と齊しく割腹なして言別せんと硯
取寄伯父と兄とよ書置認め諸肌ぬき之刀引拔逆手よもち我腹と突貫ぬのんと身搦へ
せり

第十七回

登時一間に聲ありて早まり給ふな稻生氏と云れて亦も駭く稻生圓草刀押隠せば襖を
開き三の井が徐々出て稻生よ向ひ最前自己用事ありて次の一間へ來る折夜の明渡れ
ど襖をもちて火影映れば未だ起出給ハぬのと失敬ならさし覗ハ委細ハ知らぬと切
腹爲んず御容子ゆる驚さしまゝ不圖聲と出せしかりと語るよ稻生面目なく差俯向て
權八郎よ今宵陰山正太夫が伽よ來り女の首を斬しより長光の一刀折たれば兄庄左衛
門よ言譯あしと切腹せしを物語斯ては自己もまた庄左衛門よ言譯なき
して果んと思ふ心なりと聞て三の井果れ果須臾言葉もなりのりし山

正太夫が兄も言譯たゝずして切腹爲しは是非あけれど續て御身の政果あば後日よ言譯とる者あらん若しまた庄左衛門が疑感を生ト怒るとも君の所爲もあらざれば決して死るよ及まト夫の三の井が力を盡し御身の難儀もならざるよふ取計ひまいらせん蔭山が死骸ハ何へ置きしやと尋られ匿置し納戸の戸を開三の井氏御覽あれと云つと蒲團をどりのけれバ正太夫の影ごもあらねば權八郎不審とれを稻生氏正太夫の死骸ハ何れよと問れ平太郎も蔭山の形あらざるよ始めて氣の附き大に駭き猶まゝ納戸の中を殘るくまなく捜せども朱よ染りし血汐の色さへ消ておくあり唯疊計りあるのみなれば平太郎いよ果須臾茫然として居りけり稍ありて權八郎太き息つき稻生も向ひ是も正しく變化の爲所よて御身危く一命ヲ落と處なりしも僥倖拙者が來合せふりしハ偏も神明の加護もやよらんと感歎すきバ稻生の猶さら大に歡喜權八郎の助くるよあらざきバ犬死せんとして厚く實意を謝しりけり

編者曰稻生物怪録よと三の井權八郎と同年九月上旬よ死去しと記しこれと开ハ

稻生の養子新八郎の死去せしと書誤りし者ならん又新八郎も妖魔の爲よ死去せしよとあらせ命數の定まれる者ありと云开之次の條よ魔王顯れ平太郎よ告るを待て看客官取知給ふべし

第十八回

去程よ過行月日よ關守あくとや晦日到りければ平太郎指折屈めて其日を數ふるよ妖怪よ出會しより既よ一月何時まで懸る難氣よ遇や熟々思ひ廻らせバ皆自己の招きし不幸遺憾の事を爲てけりと一個机へよ寄懸り暫時眠む其折柄吹來風の烈き音にふつと目覺て四邊と見れば燈下の元よ人來り愆然としてイみ居るよ稻生目をつけ化けが今宵も我と劫のさんと姿と代て來りしあらんと熟々見れハ身の丈七尺余りよて人品骨柄賤のらき肥たる身体よ上下を付殊よ兩刀を差飾りし最も立派を武士おれバ稻生聲懸何用有て案内もあく座敷よハ通られしや此程我よ難氣を懸る狐狸妖魔の類あらんとくく退散致せべし若退のざる上ハめよもの見せんと立上れば暫時待れと彼

の武士手と差延し留りれど此方の耳も掛せして刀をらりと抜放し斬て懸れば彼の
武士の莞示とうち笑後の壁も身をよせッ消るが如く壁へ自然と這入ける故平太郎施
と術なきよ力拔壁を白眼で立たる折壁の中より以前の武士壁を發し我汝も告たきこ
とありて態々今宵來りしと我云ふことを聞せして我を斬んとさそうへい我まゝ汝も
災を與ふべきぞ如何も汝が強氣なるも開け及ざることと思ひ刀を納て承まわれど
云ひなれば稻生も是迄の事を思ひ逆も妖魔も敵し難きと知れる故拔放せし刀を鞘
治めければ彼武士以前の如く壁の中より顯れいで稻生か前も居直りて俗も汝の氣強
き者のな今と我名と名乗聞せん我の賤しき狐狸の類もあらま此日本の國中ある高山
よ住家を求め人民を誑のすと以て業とする魔王よして名も山本五郎左衛門と云者な
り我外よまた神野悪五郎と云者あり是の我が舎弟あるが是も魔王の頭たり日本よ
魔王と稱ふるハ我と神野兩魔よ余の皆配下の者よ一あれバ我指揮よより隨つて其
用をそるものあり然るよ汝五月雨の露をかろして大熊山よ登り來り一時我汝も行合

たれど汝と少もまらず其折汝の相を見る一當七月は汝の身に災ひ來るを知しゆへ我
その難と防んため斯と異形を顯せしぞ然るよ汝強氣して少も刻る氣色なきよより永
々逗留致せしは最氣の毒のことをまてたりとて病者を救の良術を平太郎よぞ援ぐる

第十九回

魔王山本五郎左衛門は懷中より恭一く一の巻物取出し是日本の神法よて蒼生心經術
と稱病者を救の法よして呪あいと云り今や汝も傳をのんと彼巻物を手渡さしその
仕方の種々と稻生よ委く教へなれば平太郎と了讀斜あらま喜悅五左衛門を上座よ
居し再び魔王よ折向ひ新八郎や權八郎の身の上を尋なれば山本日三の井權八郎と我
法を強氣よ任して妨くるゆへ病を以て惱せしが最早無用のことされバ今宵の中も平
愈さそべし汝が兄の新八と我が惱めたる者あらま是短命の生來されバ救得さす良
法をし當年九月十一日午の刻よ死去べしと告なれば平太郎と衰しくて最と悲歎よ沈
む折柄遙のよ聞る二更の鐘よ五郎左衛門遲滞きたりと膝立ちせしが亦も平太



稲生平太郎

我は今より奥羽の金花山に到るあり汝も是限永らく妨たけ致せしと禮義を述て立上れば稻生の送りて別れを惜み魔王も就て庭先まで出れば魔王の家來とおぼしくて異形の者四五人乗物を前へ置其他鎗長刀を陳列たて扣居るの五郎左衛門を見ると等しく土地はひとと平伏たり此とき一個の家來が乗物の戸を引開け山本が駕籠に乗よと見るうち空中より白雲鼻下駕籠を覆へば忽ちち登るが如くは消失せけり

記者聞處よれば五郎左衛門が此時の供立の行列の凡そ三十万石位の大名の況も見えたれど家來と覺しき者のみさ西遊記もある化物に等しきさまなりと云り平太郎の五郎左衛門の歸り去しと三の井も告んと權八郎方へ列れのみ今山本の言一如く權八郎の病平癒し最健康となりければ稻生も語り喜悅せんと思し處へ平太郎來り魔王退去のことを告ければ三の井も斜ならず歡喜ひ猶云々と山本の傳しことども物語り其夜へ兩個眠りやらで夜を明しぬ

明治十七年一月廿九日出版御届 (定價金十八錢)

編輯兼出版人 東京府平民 加藤正七

日本橋區檢物町八番地

發兌大賣捌

旭昇堂 同所

日本橋區通一丁目 大倉孫兵衛
 同横山町三丁目 辻岡文助
 同通三丁目 小林鉄次郎
 同室町三丁目 滑林稽堂
 同南傳馬町一丁目 萬屋吉藏
 同本石町三丁目 武藏屋本店
 同兩國吉川町 大黒屋平吉
 同人形町 具足屋熊次郎
 同馬喰町二丁目 綱嶋龜吉
 同元大阪町 法木徳兵衛

神田區五軒町 小笠原書房
 同御成道 潛心書房
 同裏神保町 吾妻屋書房
 同雉子町 同聲社
 日本橋區横山町 金聲堂
 同通四丁目 萬字堂
 同橋區南鍋町 山喜本
 同木挽町一丁目 春中太郎
 同銀座四丁目 芝區新櫻田町 陽太堂

廣告

重野樺堂校閱 高橋先生序文 櫻井能監選辭 安田義和編輯

○高等記 作文軌範 全二冊 定價八十錢 郵便稅廿二錢

世ニ作文ノ書多シト雖モ悉ク音訓ノ假字ヲ
 認リ四聲混滞シ語路踏違ヘ加之一口氣ノ語
 格ヲ以テ初學ヲ滿誘スルナク歎キ弊ヲ矯正セ
 ント欲シ古今大家名文ノ簡易ナルヲ採擷シ
 雅訓ナル類語及ヒ助字虚字ノ詳解ヲ掲ケ其
 道ニ堪熊ナル重野先生ノ校閱刪補ヲ經シモ
 ノナレハ實ニ作文書類第一等ノ良書ナリ

醉多道士校閱 岡本湖月編 月岡芳年圖畫

○釋官 戲文軌範 全三冊 定價金七十錢 郵便稅金十六錢

忽ニシテ料理屋忽ニシテ呉服屋忽ニシテ菓
 子屋忽ニシテ小間物屋此レ此書ニ排列セル

商賣ナリ其商賣ノ引札中有名ナル風來
 山人、馬琴、京傳、三馬、以下數十家ノ俊
 作ニ係ル甘ガ如ク醉カ如キツト面白
 キ戯文ヲ掲ゲナレハ風流雅君ヨ一本ヲ
 求メ玉ヘッ
 瀧亭鯉丈著

○滑稽和合人 洋本 定價金七十錢 郵便稅金廿六錢

醉多道士增訂戲評 梅亭化三大人戲作
 ○林話 七偏 人 洋本 定價金五十錢 郵便稅金十錢

臍とんで天ノ舞ハ願はづれて測り躍る
 どんち石類の堅造も一度縋と解ときは
 ワハ、は、是ハ茶ばくいと忽顔の玄まり
 と崩す妙痴氣林話の滑稽書はサア此て
 五さいく娛覽あさいく

○禁賊 釜の淵の由來 近刻
 ○比譚 鎌倉治亂記 近刻

自 一 年 五 月 十 日 起 至 十 月 十 日 止 凡 在 此 期 間 內 凡 有 不 良 行 為 者 一 律 處 以 嚴 懲 不 貸 此 令